「事故や災害から子供たちの命を守る取り組みを検討する」諮問に対する提案書

子供たちの命を守る特別委員会
委員長　中　村　裕　一

災害から「子供たちの命を守る」ために我々には何ができるのか、我々は何を行わなければならないのか、我々子供たちの命を守る特別委員会(以下、委員会)の導いた答えは、自助自立、自分の命は自分で守ること。そして防災教育を徹底し、親子で防災について学び正しい知識を身に着け、家族で話し合い、日頃から防災訓練などに参加し防災行動力を高め、行政・地域・学校との提携・強化をしていこうというものである。ただこれだけの内容を一気に実行していくには、莫大な労力と時間的・物理的な制限があり、残念ながらすべてを今すぐに実行し効果を得ることは不可能であると考えられる。

しかし、我々には立ち止まることは許されない、例え小さな一歩でも「子供たちの命を守るために」確実に前に進んで行き続けなければならないのだ。そこで委員会は、小さな一歩ではあるが確実で命を守るため継続可能でかつ効果が期待されるであろう**「家庭内 DIG」の普及実践**を提案したいと考える。

これまでに起きた地震では、家屋の倒壊のほか、家具の転倒や落下物、ガラスの破損などにより、多くの方がケガをし、命を落としました。いつ起きても不思議ではない地震に対し、しっかりと対策をとらなければ、大きな被害があることは明らかで、過去の災害では多くの被災者が避難所に押し寄せ、避難所での生活は大変過酷なものと予想される。そんな避難生活をすることなく、引き続き自宅で生活するためには、また地震の後、電気・ガス・水道が止まってしまっている不自由な中、いかにして自宅で生活していくか、そのためには、どのような準備をしておけばいいのか、この家庭内 DIG を使って家族で話し合いをしてみるのが有効であると考える。自分の命は自分で守る、家庭での地震対策や避難を検討する方法として、家族団欒のひと時に家の見取り図を見ながら、大切な家族の安全を家族全員で話し合うことにより、家庭の地震対策や避難について再確認するいい機会になると考えられる。防災対策を再認識するとともに親子家族間のコミュニケーションの再構築にも有効である。先ずは話し合える環境と、より身近な所からしっかり対策していくことが大切であり、徐々にその対象を広域に広げて**「DIG（災害図上訓練）」**による防災教育に繋げていけばよいのではないだろうか。

DIG(別紙DIGとは参照)とは、大きな地図を囲みながら、参加者全員で災害時の対応策などを考える訓練のことで、DisasterImaginationGameの頭文字をとって「DIG（ディグ）」と名付けられ、英語の動詞”dig”には、「掘り起こす、探求する、理解する」といった意味があり「防災意識を掘り起こそう」「地域を探求しよう」「災害を理解しよう」といったねらいがある。

特徴としては、参加型の防災ワークショップで参加者は大きな地図を囲み、全員が書き込みを加えながら議論をすることにより、その過程で、被害の状況を想定することができ、その地域の災害に対する強さや弱さも明確になってくる。また家庭や地域と連携して行うことで地域防災力の在り方も見え、災害に強いコミュニティ作りの方向性も明確になってくるであろう。

これを鑑み、山梨県PTA協議会(以下、協議会)としては、行政・教育現場と連携し「DIG(家庭内DIG)含む」普及に努めることが肝要であると考える。その方法論としては、協議会事業及び広報におけるPR活動はもとより、「家庭内DIG」を授業参観等での教育現場の授業に取り入れてもらうように働きかけ、また長期休暇(夏休み・冬休み)の課題(夏休み・冬休みの友など)または自由研究など親子で共同作業し防災意識を高める環境を整備する提言を対外的に行うことも必要であろう。「DIG（災害図上訓練）」では、各単Pで地域を巻き込みながら実践してもらうのが理想であるが、その前に先ず協議会で行政(教育委員会)等と連携し内部勉強会を開催しながら、防災教育の知識、技術の向上に努め、単Pサービスの一環として単Pが主催する「家庭内DIG」「DIG（災害図上訓練）」のファシリティター及びコーディネーターを務められる人材を育成することも肝要で、5年以内に全学校、全児童生徒が家庭内DIG及び災害図上訓練としてのDIGを体験させることを急務とし、更なる防災教育の飛躍の一歩としていきたいと考える。